一　次の文章を読んで、問いに答えよ。

私たちが日常生活の中で出会う断片的なことばを試みに列挙してみましょう。

ⓐ　ニュースの見出し
ⓑ　スポーツ競技での応援やかけ声
ⓒ　喫茶店で、隣の席から聞こえてくる会話
ⓓ　国語試験の問題文
ⓔ　テレビをつけたときに聞こえてくることば
ⓕ　メモ、注釈
ⓖ　年賀状に書きつけられた「一言」（「また同窓会やりましょう」のような）

ほとんどランダムにあげた事例のように見えるかもしれませんが、いずれのことばも㋐断片であることで大きな機能を果たしています。たとえばⓐの見出しの場合、最大のポイントはそれが要約として全体をほのめかしていることです。全体を見る前に、その一部なりまとめなりを示すことで、読者や視聴者がそのニュースの本文を見るかどうかの判断を助けます。この場合、断片性は縮約の機能を果たしていると言えるでしょう。〈　1　〉

しかし、それだけではありません。「見出し」の表向きの機能は情報伝達でしょうが、実際には断片であることによって、情報のスピード感や衝撃性も高まります。たとえば、以下のような見出しを見てみましょう。

●東京のコロナ感染者　５１５人

●記述式・民間試験「実現困難」大学入試の検討会議（「日本教育新聞」二〇二一年七月九日）

コロナ感染者数の見出しは、この数字が多いのか少ないのかわからないけれど、とにかくすごい、情報価値があるようだという印象を受けます。「こんな数だ！」という切迫感があるのです。二つめの見出しでも、「記述式」「民間試験」「検討会議」といった語句が何を意味するのかまったくわからなくとも、「実現困難」という表現を見たとたんに、「何かが失敗したらしいな」

「忌まわしいことがあったのだな」ということはわかるでしょう。しかもそれが今、明らかになった。そこから衝撃が伝わってきます。

このように情報というものは短く断片的であるだけで、注目に値するものであると感じられることがあります。その内容にかかわらず、「この情報は価値があるよ！」というシグナルが出る。どんなことばにもそれなりの演出効果は伴っており、私たちは知らず知らずのうちにことばが身にまとう「場」の空気のようなものを了解した上で意味を読み取るわけですが、とりわけ見出しなどの断片は緊急性やニュース性を暗示し、注意を喚起する効果が大きいようです。ことばは短いほど当然ながら情報量は少なくなりますが、短いことによって高まる「情報の小出し感」や「期待感」に加え、あまり根拠のない「意味の含み」が示唆され、情報価値が高められるということです。たとえば、X（旧ツイッター）のトレンド欄に「得意満面」という表現があると、それ自体どういうことのないことばなのに、つい「いったい何だろう?」とクリックしてしまうのはそのためです。

これはことばの働きのより本質的な部分を示すように思います。〈　2　〉こういうとすぐに「余韻」ということばが連想されるでしょうが、「余韻」というと喪失感を伴った情緒的な反応が想起されます。もちろんそうした要素もあるのですが、ここではより広い事例について見ていきます。（中略）

私たちは日々、さまざまなことばの断片と接しています。その多くは単なる雑音として、認知すらされずに消えていく。私たちが意図的に記憶に残そうとすることばは、たいていははじめからその「用途」がはっきりしたことばで、私たちも必要があってそうしたことばを受け取っています。たとえば先生からの連絡事項、仕事で頼まれた伝言、購入した商品の説明、明日の天気予報、などなど。

しかし、そうした必要の枠を超えたところから私たちの日常世界に侵入してくる、予測不能で①トウトツで乱暴なことばもあるわけです。それらは膨大な数に上ります。たとえそれらのほとんどが記憶に残らずに消え去ったとしても、私たちにインパクトを与える「想定外の断片」はかなりの数に上るでしょう。〈　3　〉

これらはたいてい「漏れ聞こえ」として体験されます。先述のⓒの「喫茶店で、隣の席から聞こえてくる会話」やⓔの「テレ

ビをつけたときに聞こえてくることば」のことを思い出してみましょう。これらのことばが不思議とこちらの注意を引いたり、記憶に残ったりするのはなぜか。〈　4　〉テレビや会話の例からわかるのは、そうした断片が向こう側に一つの世界を想像させるということです。その世界は有機的に統合されており、決してばらばらの断片の寄せ集めではない。人がいて感情にも道筋があり、道理が通っている。断片を通してそうした有機的な世界にまでたどり着くとなると、断片との接触は単なる偶発的で②些末な「事故」では終わらなくなってきます。むしろ「出会い」「遭遇」として体験される。そのとき、断片は単なる雑音以上のものとなります。

こうした断片が想起させるのは、「さらに目をこらしてその向こうを探れば、見知らぬおもしろい世界が見えてくるかもしれない」という予感です。ここには私たちが情報と接して、「興味深い」「価値がある」と思うときの感覚の原型があるように思われます。〈　5　〉

たとえば国語の教科書に掲載される文章の多くは、実際に出版されたものを縮約したり、一部抜粋したりしたものです。誤解を恐れずに言えば、「試食」もしくは「つまみ食い」です。本来なら「つまみ食い」よりも①「フルコース」で全部食べたほうがよさそうに思えます。ところが教科書のスペースは限られているから、仕方なくそうなっていると私たちは考えがちです。

しかし、ほんとうにそうでしょうか。実はまさに断片であることがそこに掲載されている文章をより［A］的に見せているということはないでしょうか。あるいは断片として掲載することでその［A］が輝かないようなものは、そもそも掲載してもあまり意味がないのかもしれません。

国語の教科書と似たような構造を持つものに、ⓓで取り上げた国語試験の問題文があります。たとえば以下のような設問形式は、国語問題ではおなじみです。

第2問　次の文章は、原民喜「翳（かげ）」（一九四八年発表）の一節である。これを読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。なお、設問の都合で本文の上に行数を付してある。

1　私は一九四四年の秋に妻を喪（うしな）ったが、ごく少数の知己へ送った死亡通知のほかに、満洲にいる魚芳（うおよし）へも端書（はがき）を差出（さしだ）して

おいた。妻を喪った私は悔み状が来るたびに、丁寧に読み返し仏壇のほとりに供えておいた。（以下、略）

（二〇二〇年大学入試センター試験・国語）

国語の設問では、「次の文章」「一節」「これを読んで」といった抜粋や指示のジェスチャーを通して、本文の断片性や切り抜き性をこれでもかと引き立てているように見えます。人によっては、文章のナマの味を殺ぐ「解体」だとか「解剖」だと非難するかもしれません。しかも、これらの導入に加えて、設問や行数の付与があったりして、原民喜の文章そのものをゆっくり読めないと思う人もいるでしょう。

しかし、ここでも私は同じ問いを立てたいと思います。このように切り刻んで断片化し、作者が最終的に発表した形から逸脱させることで、かえって文章の魅力が増すということはほんとうにないのか、ということです。

たとえばこうした前置きを経て読むだけで、「翳」の一節に私たちはなみなみならぬ注意を向けるでしょう。おそらくは作問者も、そうした注意を向けられてそれに応えられるだけのものがある部分をここに掲載しているのではないか。〈　6　〉いきなり妻の死というショッキングな事態を語る冒頭部は、その後「死亡通知」や「満洲にいる魚芳」や「端書」といった、いささか③迂遠なことばに引き継がれますが、その後に続く文章では、微妙な感情の綾をたどりながら個人名をつなぎ、じわじわと物語的興味が広がっていきます。いつの間にか語りの葛藤も浮かび上がってきます。

ここでわかるのは、まず試験問題の設問で「これから断片を見せるので注目してください」といわば「断片への目線」が用意された上で、そこに提示される本文の中の語り手も「断片に注目」するというジェスチャーを示しているということです。これをより細分化していえば、人物として立てられた主人公が細部に注目し、語り手がその主人公の視点をなぞりながら細部にフォーカスし、作問者や読者もまたそうした細部へのフォーカスを追いかけるようにして反復するという、㋑相乗り的な効果がここには見られます。こうした累積的な断片への注目は、最終的には断片の向こう側への興味をかき立てます。私たちが断片に引きつけられる際には、物語一般が私たちを引きつけるのと同じような「興味の構造」に乗っているということがここから言えそうです。

これは隠喩や象徴といった文学的な装置の多くが、㊀短いものや小さいものを通してより長いものや大きいものを指し示すことも関係しているでしょう。とりわけ象徴は小さいものによって大きな概念や感情や葛藤などを示すのが特徴です。有名な例でいえば、志賀直哉の『城の崎にて』に出てくるイモリとか、梶井基次郎の『檸檬』に出てくるレモンなどのサイズ感が参考になるでしょう。こうしたものは文学作品を動かすためには非常に重要なのですが、私たちは象徴や比喩といった概念にすっかり慣れ、わかったつもりになっているため、その働きや効果にまだまだわからないところがあることを忘れがちです。たとえば、なぜ象徴は「小さいもの」である必要があるのか。もちろん山や月のような大きいものが象徴とされることもありますが、そういう場合も、山や月は限界のあるものとして認識されているでしょう。月であれば、月／太陽、月／人間、月／闇夜といった対比に組み込まれることで、④リンカクの明瞭なアイテムとして頭の中で整理されてしまう。アイテム化されるや否や、月にはイモリやレモンとそう変わりのないサイズ感が生まれてしまうのです。

このような「小ささ」の活用の背後にあるのは「［　B　］」という認識かもしれません。佐藤信夫さんは、比喩などのことばの綾が活用されるのは、現実が「無限に変容する」のに対し「単語の数はしょせん有限」だからだと説明します。

国語辞典のなかにはとてもかぞえきれないほど大量の単語がひしめいているのだから、ちょっと考えてみると、ものごとの修飾に不自由する理由はないようにも思われる。しかし実際には、現実のありさまを的確に表現する単語が見つからなくて、いらいらすることが少なくない。たとえどれほど数が多くても、単語の数はしょせん有限であり、他方、私どもを取り巻く現実や私どもの心のなかの風景は無限に変容するからである。

有限のことばを使って無限のものごとを表現するには、じゅうぶんに揃（そろ）っていない大工道具で工作をするときのように、工夫が必要だ。工面しなければ用がたりない……ということこそ言語のひとつの宿命だと言わなければならない。そういう工夫がことばのあやであり、あやのうちでもっとも基本となる型が、《直喩》である（『レトリック感覚』）。

「有限のことばを使って無限のものごとを表現する」というプロセスは、認識だけではなく表現や構築など私たちのさまざまな活動に組み込まれた原理なのかもしれません。私たちは物事を理解したり再構築したりする形で周囲の世界と接触するときに

は、二つのステップを経ることで達成感を得るのではないでしょうか。一つめのステップは、小さい断片を一つ一つとらえる段階。これがまさに断片との出会いの段階です。そして、その次のステップとして、断片を通してより大きいものをぼんやり把握する想像的な段階が来る。私たちが何事かを理解したと感じるとき、この二つのステップが順に踏まれることが必要となるのかもしれません。二つのステップが踏まれると、ことばの行方に対して自発的に興味が湧き膨らみ、「理解」という体験が、まるで潮の流れのように体感される。私たちはそういう心のプロセスを「おもしろさ」や「奥行き」として感じ、興奮を覚えるのではないでしょうか。

（阿部公彦『文章は「形」から読む』による。なお一部を改めた。）

問1 傍線①、④のカタカナを漢字に改めよ。楷書で正確に書くこと。

問2 傍線②、③の読み方をひらがなで書け。

問3 傍線㋐に「断片であることで大きな機能を果たしています」とあるが、その「機能」として、適当ではないものを、次のなかから一つ選び、その番号をマークせよ。

1 注目　2 衝撃　3 縮約　4 暗示　5 修飾　6 余韻

問4 次の一文は、本文中の〈 1 〉～〈 6 〉のどこに入れるのが最も適当か。その番号をマークせよ。

ことばというものは多くを語らないことでこそ、むしろ多くを語るのかもしれない。

問5 傍線㋑に「教科書のスペースは限られているから、仕方なくそうなっていると私たちは考えがち」とあるが、その考えを筆者は疑っている。筆者が疑う理由として、最も適当なものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

1 断片として採用された部分に注意を向けるというプロセスを経ることで、学習者の興味が広がることになるから
2 断片として採用された部分は、学習者が予測不能で乱暴なことばを避けられるよう意図的に厳選されたものだから
3 断片として採用された部分をできるだけ多く「つまみ食い」させることが、学習者の知的な探求の入口となるから
4 断片として採用された部分だけが、学習者に「興味深い」「価値がある」といった感覚を呼び覚ませるものだから
5 断片として採用された部分は、学習者を「想定外の断片」と出会わせるために戦略的に編集されたテキストだから

問6 A には同じ語が入る。最も適当な語を、本文中からそのまま抜き出して、二字で書け。

問7 傍線㋒に「相乗り的な効果」とあるが、その具体的な説明として、最も適当なものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

1 「死亡通知」「悔み状」「仏壇」といった断片の集積を利用して、妻の死という出来事の衝撃を密かに演出する効果
2 設問の「一節」のような断片と本文の「端書」「死亡通知」の短文との反復によって、読者の読解が助けられる効果
3 「死亡通知」「魚芳」などの主人公の細部へのフォーカスを語り手がなぞり、それを作問者や読者が追体験する効果
4 試験問題の「次の文章」「一節」などの指示と本文の「ごく少数」「端書」などを共鳴させて、読者を正解に誘う効果
5 語り手が「満洲」「端書」といったような細部を強調することで、作問者や読者を主人公の悲しみに共感させる効果

問8 傍線㋓に「短いものや小さいものを通してより長いものや大きいものを指し示すこと」とあるが、「より長いものや大きいもの」を理解しようとする時、私たちに生じることとして、最も適当な部分を、解答欄に合うように本文中から三十一字でそのまま抜き出して、始めと終わりの五字を書け。

問9 B に入れるのに、最も適当なものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

1 ことばは瞬間的に消え去るものだ
2 ことばは根本的にわからないものだ
3 ことばは形式的に自由なものだ
4 ことばは基本的に足りないものだ
5 ことばは本質的にあいまいなものだ
6 ことばは主体的に選び取るものだ

問10 本文の内容に合うものを、次のなかから二つ選び、その番号をマークせよ。

1 X（旧ツイッター）のトレンド欄に「得意満面」という表現があると、そのことばに含意される喪失感を伴う「余韻」が連想され、「いったい何だろう?」とついクリックしてしまうという情緒的な連鎖反応が引き起こされがちである。
2 「見出し」の表向きの機能は情報伝達で、それが断片であることで情報のスピード感や衝撃性を高めることはできるが、累積した断片を振り返ってみると、単に注目を集めるための注意喚起に過ぎなかったと理解されることもある。
3 さまざまな断片と接触するだけではその出会いは単なる偶発的な「事故」にとどまるが、断片への注目を積み重ねることを通してその向こう側にある一つの有機的に統合された世界に到達できれば、それは私たちを引きつけるものとなる。
4 ことばというものは多くを語らないことでこそむしろ多くを語るという性質を持つので、優れた文学作品では短いことばや断片により「含意」や「余韻」を作ってことばの本質的な部分を隠蔽することで、読者参加を促している。
5 国語試験の問題文では、抜粋や指示のジェスチャーを通して本文の断片性や切り抜き性が引き立てられるが、それは結局は作問者の読みに限定された解体作業になるため、原文の持っているナマの味は損なわれてしまう。
6 象徴は小さいものによって大きな概念や感情や葛藤などを示すことが多いが、山や月のような大きいものが象徴に用いられる場合には、たとえば対象をアイテム化するということによって対応される。

問11 原民喜「翳」（一九四八年）と同年に発表された小説を、次のなかから一つ選び、その番号をマークせよ。

1 みだれ髪　2 人間失格　3 火垂るの墓　4 舞姫　5 春と修羅　6 ヒロシマ・ノート

二　次の文章を読んで、問いに答えよ。

演繹と帰納とともに、第三の推論とされるのがアブダクションである。アブダクションは遡及的推論とも呼ばれ、結果からさかのぼってその原因を推測する論理である。前提から結論を導き出す演繹的推論とは逆の経路をたどる。科学的探究の最初の段階である「仮説」（なんらかの現象や法則性を説明するのに仮に立てられた考え）を作る時に用いられる。科学理論や法則の発見のもとになる仮説の形成過程は、天才のひらめきによって説明されることが多かった。しかし、演繹や帰納との違いを強く意識しながら、その論理を表現したのが以下のアブダクションの推論の形式である。

「常識では(ア)腑に落ちない驚くべき事実Bが観察される」
「しかし、もしA（という原理・原因・条件）が正しいとすれば、Bは当然のことであろう」
「よって、Aが正しいと考えるべき理由がある」

この構造を論理学の一般的な形式に倣って書くと、

「Bである」
「もしAならばBである」
「よって、Aは確からしい」

論理学では「確からしい」という曖昧な言葉は決して使わないが、アメリカの哲学者パースがアブダクション（またはリトロダクション）と呼び、数学者ポリアが「発見的三段論法」と名づけた上記の疑似三段論法は、仮説の段階の「そうらしい」という考え方がどのようなものか、(イ)その積極的な意義を教えてくれる。この論理を科学的探究の三段階に照らして具体的に見ていこう。

まずあらゆる探究は、常識的な期待に背くような驚くべき事実の観察から起こる。探究はその驚きが解決される説明を求めて、その事実をあらゆる側面から考察することから始まる。そして、その事実がなぜ起こったかについて可能な説明を与えてくれる仮説を考え出す。これがアブダクション（仮説形成）であり探究の第一段階とされる。結果（驚くべき事実）からさかのぼって

その原因を特定する遡及的推論である。遡及的推論はその名の通り、どのような原因から最後の結果が出てきたかを尋ね、それはさらにどんなことから導かれたのかを次々に推理していって、遂に結果である驚くべき事実にたどり着くが、たどり着いた時にはその驚くべき事実には合理的な説明が与えられているので当然の事となる。〈　1　〉事実から仮説を立て、また事実に戻ってそこから別の仮説を立てる、この繰り返しによって驚くべき事実を最もよく説明する、それ以外にはありえない原因をつき止める。

探究の第二段階は「演繹」によって行われる。もしその仮説が真であるとしたら、その仮説からどんな結果が必然的に導かれるのか、アブダクションによって提案された仮説をできるかぎり明確にし、その仮説に含まれている予測を、実験や観察で検証（テスト）できる形に、言葉または数式で示さなければならない。〈　2　〉つまり仮説を解明し、証明できる形にする段階が探究の第二段階であり、ここでは演繹の方法が用いられる。逆向きに行った発見的な推論を、今度は演繹によって前提から結論を導き出す「前向きの推論」に言い換える。

探究の第三段階は「帰納」によって行われる。演繹の目的は仮説から導かれるすべての結果（帰結・結論）を集め、それを法則や原理、理論の形にする、つまり検証可能な命題の形にすることだったが、その検討が行われた後には、その結論がどれだけ経験と一致するのかを確かめる「帰納」の段階に入る。仮説が正しいか、なんらかの修正が必要か、または拒否すべきであるかを経験に照らして判断するのが帰納の思考である。〈　3　〉探究は仮説を経験的事実に照らして判断することで一応完結する。科学の探究がどこまでも「一応の完結」とされるのは、ひとつの仮説の検証が終わっても、別の観点から全く別の説明が可能になる可能性があるからである。実際、科学はアブダクション→演繹→帰納から成る仮説の検証と修正を繰り返しながら発展してきた歴史を持つ。

この探究の三段階の過程をよく表した例として、米盛裕二は「海王星の発見」を挙げている。天王星の異常な運動という変則性に注目したイギリスとフランスの天文学者は、何が原因で起こるのかその可能な原因を調べ、熟慮の結果、天王星の外側に未知の天体が存在し、天王星の軌道に影響を与えているのではないかという仮説を立てた。そしてその仮説が真だとしたら、未知

の天体の軌道要素はどのようなものでなくてはならないかを計算で求め、それをもとに未知の天体の位置を予測した（仮説の必然的な帰結として予測を行う推論と計算が演繹）。そしてその予測に従ってドイツの天文学者がベルリン天文台で観測したところ、一八四六年に海王星が確認された（経験による仮説の検証＝帰納）。海王星の発見は単なる幸運ではなかった。様々な仮説を検討しつくし、ニュートンの重力の法則の理論の変更すら考えながらも、他のすべての可能性が否定されるまではその仮説は取らずに、最終的にニュートンの理論を用いて誤差が一度以内という驚くべき精度の予測を立てたからである。〈　4　〉

では探究の第一歩となる(ウ)アブダクションは、演繹、帰納、蓋然的推論とはどう違うのだろうか。演繹は、真とされる前提（既知のもの）を根拠としてある結論（未知のもの）を導き出す推論を指し、前提が真であるならばその結論は「必然的に」真になる。つまり真である前提から真である結論へとすり足で進む演繹においては、前提に含まれた以上の新しい知識／情報が入り込む余地がない。それに対してアブダクションは、新しい知識や諸観念を発見し知識の「拡張」をもたらす。演繹においては前提から導かれる結論が「真か否か」が推論を分析し評定する観点であるのに対して、アブダクションにおいては「拡張的か否か」、つまりどのような拡張的機能を持っているかが推論を分析し評価する観点となる。その一方で、拡張的機能が大きい推論ほど間違う可能性の高い、弱い推論となるのも事実である。実際、結論となる事象に規則を適用して前提を推論する遡及的推論は、論理学では「後件肯定」と呼ばれ、「後件肯定の誤謬（ごびゅう）」と呼ばれる間違った結論を導く可能性のある推論方法である。〈　5　〉

しかしそうした論理的には必ずしも正しくはないという側面が、未知の存在や、既知のものの間に全く新しい関係性を見出す余地を生む。つまりすり足で進む演繹的推論では認められない、常には正しくない、論理の必然的な帰結として導かれるわけではない「非―論理的」な思考が、未知のものの発見という思考の飛躍を可能にするのである。科学という厳密な学問領域とは一見相容れないような［A］を積極的に受け入れる推論の形がアブダクションなのである。

ではレトリックの蓋然的推論とはどう違うのだろうか。蓋然的推論は、人々の通念や常識を論拠に結論を導き出す。それに対してアブダクションは、これまでの通念や常識の覆いを取り去ったところに、既存のものの新しい関係を見出し、そこから「新たな観点＝発見」を導き出す。コペルニクスの地動説やニュートンの万有引力の法則、アインシュタインの相対性理論は、それ

までの社会的通念や、既存の科学理論で常識とされていたことを否定したところに新たな観点を立てたことで、より広い事象を統一的に説明する理論を作り上げた。

帰納との違いは、帰納は観察可能な事象を一般化するのに対して、アブダクションは多くの場合、観察可能な事象から直接観察することが不可能な原因を推論することである。ニュートンの引力の発見はこの観察不可能な原因の代表例として挙げられるだろう。帰納による一般化においては、どれだけ観察を繰り返しても「引力」という新しい概念は生まれないが、そこで「なぜ」と問うことが思考の方向性を変える。「同じことが繰り返される」ことが帰納による一般化の前提であるのに対して、アブダクションには「なぜ」に答える原因究明の「目的志向性（自覚的な探究）」が加わるからである。

以上のように、仮説を思いつき吟味することは、演繹や帰納とは異なるアブダクションという推論である。ただし仮説を思いついた後で、それを検証可能な形に読み替える時には演繹的に言い換え、観察によって帰納的に事実確認を行うことで、仮説を実証――事実を拠り所として証明――する。このように、アブダクション、演繹、帰納の三つの異なる推論の形式を一つのセットとして段階的に用いることで、仮説形成という個人の探究は、どこでも、誰にでも通用する公共の知識に成り得るのである。

（渡邉雅子『論理的思考とは何か』による。なお一部を改めた。）

問1 傍線㋐の「腑に落ちない」の意味として、最も適当なものを次のなかから選び、その番号をマークせよ。

1 我慢できない　2 計り知れない　3 納得できない　4 疑問が残らない　5 つき刺さらない

問2 傍線㋑に「その積極的な意義」とあるが、その説明として、最も適当なものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

1 仮説が新発見や真理を生み出し、科学を進歩させてきたということ
2 仮説を拠り所として驚くべき科学的事実が発見されてきたということ
3 仮説は演繹的、帰納的確認を経て科学的に実証されてきたということ
4 仮説の検証と修正を反復することによって科学は発展してきたということ
5 仮説に基づく推論の追究で科学的かつ合理的説明が可能になったということ

問3 次の一文は、本文中の〈 1 〉～〈 5 〉のどこに入れるのが最も適当か。その番号をマークせよ。

仮説とは、驚くべき事実を説明する解釈である。

問4 A に入れるのに、最も適当な語を、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

1 観念性　2 虚構性　3 具象性　4 抽象性　5 創造性

問5 傍線㋒に「アブダクションは、演繹、帰納、蓋然的推論とはどう違うのだろうか」とあるが、その説明として、最も適当なものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

1 演繹は既知のものを前提とする、帰納は観察可能な事象の一般化を図る、蓋然的推論は通念や常識を論拠にするのに対して、アブダクションは知識を拡張させ、原因究明の目的志向性をもち、既存のものを否定する論理である。

2 演繹は真とされる前提を根拠とする、帰納は様々な事象から法則を導きだす、蓋然的推論は、新知見の発見に注力するのに対して、アブダクションは新知識や諸観念を拡張させ、発展させる。

3 演繹は真を前提に結論へと進むが、帰納は疑問から諸処の現象を通して真にむかう、蓋然的推論は、一般常識を基礎に現象を推論するのに対して、アブダクションは推論の形式を三段階に分けて考察する。

4 演繹は結論が最初に示され、帰納は結論が最後に来る、蓋然的推論は論拠を結論とするのに対して、アブダクションは推論を必然的な帰結とする。

5 演繹は観察と計測、帰納は事象の一般化、蓋然的推論は社会通念を重要視するのに対して、アブダクションは原因追究の自覚的な探究に重きを置く。

三　次の文章を読んで、問いに答えよ。

（曽我十郎・五郎（箱王）兄弟が父の敵討ちを成し遂げた後、二人とも亡くなったことが従者から母に伝えられた場面である。）

さて、母は、子供が返したる小袖を顔に押し当て、そのまま消え入り給ひにけり。女房達、やうやう抱へ申されければ、顔を少し持ち上げつつ、天に仰ぎ、地に臥し、歎き給ふぞ哀れなる。せめての事に、文を披き給へども、目も暗れ、心ならねば、胸に当て、打ち臥し、啼く啼く口説き給ひけるは、「誠に凡夫の身ほど、はかなきものは無かりけり。この小袖を後の形見に見せんとて、二人連れて来たりて借りけるを知らずして、返せと云ひつる悔しさよ。五郎が事も、今を限りと思ひて、この度、強く云ひつるぞや。幾程ともなき者故に、不孝して、この年月添はざりけるこそ①悔しけれ。なほも、心強く⑦赦さざりつれば、最期に一目も久しく添はざりしに、三日だにも打ち添はで、名残惜しさよ、懐かしさよ、打ち出でし面影は、何時の世にかは忘るべき」と声も惜しまず泣き給ふ。心なき賤の男、賤の女も、哀れと思はぬはなかりけり。

二宮の女房を始めて、親しき人々馳せ集まり、泣き悲しむ事、斜めならず。母は思ひの余りに、十郎が居たりし所に倒れ臥し、「ここに住みしものを」とばかりにて、又、［A］にけり。ややありて、顔持ち上げ、側らの障子に書きたる文を見給へば、「一切有為法、如夢幻泡影、如露亦如電、応作如是観」と書けり。身をありとも思はざる口遊み、見るに涙も止まらず。彼処の押板には、古今・万葉・伊勢物語、その他、数の草子を置きたれども、今より後の慰みに、誰かはこれを②眺むべき、見るに思ひぞ勝りける。

文をば、二宮の女房ぞ、泣く泣く読み給ひける。聞くにつけても、ただ絶え入る心地ぞし給ふ③。「皆人は、神や仏に参りては、命の幸ひをこそ申すに、この者共の明け暮れは、ただ④死に失せんとのみ申しければ、たとひ、このたび遁れたりとも、添ひも果つまじきぞや。それにつけても、箱王が、この年月の不孝、さこそうたてしく思ひつらむ。神仏こそ⑦知ろしめすべけれ。誠憎くては、不孝せざりしぞかし。法師に成りて、父の後世をも弔はせ、妾が後をも訪はれんと思ひしに、男に成りしかば、一旦の恨みばかりにて、不孝とは云ひしを、ついでなくして、何となく月日を重ねしなり。小袖・直垂着せし事も、日頃には変はらず、二宮の女房の着するやうにて取らせしを、誠に思ひて、妾を辛き者とや思ひけん。⑦よしや、中々それとても、今はよかりけり。

打ち添ひぬるものならば、なほも深く侍るべし。かくても、我が身、何かは長らへ果てん。憂き命、あるもあられぬ思ひかな」と悶へ焦れ給ひけり。

曽我の太郎も、「幼き時より育てし事なれば、実の子にも劣らず。所領数多持たざれば、一所を分くる事もなし。就中、君、御勘当の者なれば、清げならむも恐れありと思ひて、何事も、心のままにあらせざりつるこそ後悔なれ」と歎き給ふ事、限りなし。母は、日の暮れ、夜の明くるに従ひて、いよいよ思ひぞ深かりける。「この身として、命生きても何かせん。これらが行方、もしやと思ひてこそ、辛き命も惜しかりつれ。今は浄土にて、生まれ逢ひなん」とて、湯水を飲み給はで、五六日まで臥し沈み給ひしかば、露の命も危ふく見えし。親しき人々集まりて、「憂き世の中の習ひ、御身一つの歎きにあらず。さしも繁昌せし平家も、一度に十人二十人に後れ悲しむ人々も、日数積もり、年月隔たりぬれば、さてこそましませ。当時も、或いは父母に後れ、或いは夫妻に後れ、親子兄弟に別れて、歎く者共多く候へども、たちまちに命を捨つるまでの事はなし。さやうに思し召し候はば、いよいよ死し給へる人々の罪業に成りぬべし。歎き給ふ涙も、猛火と成りて、その身にかかるとこそ承り候へ。いかにも御身を全うして、後生菩提を弔ひ給へ」と様々に宣ひければ、僅かに湯水ばかりぞ聞き入れ給ふ。

さてあるべきならねば、僧達を語らひ、人々の空しき死骸を取り集め、一片の煙となし給ひけり。母、これを聞き給ふにも、弔はるべき身は留まりて、弔ふまじき者を弔ふこそ、誠に定めなき世と知られけれと、歎き給ふぞ理なる。

（エ）

（『曽我物語』による。）

注　子供が返したる小袖＝十郎・五郎は敵討ちの前に母から借りた小袖を、従者に託して母に返した。　凡夫＝凡人。
五郎が事＝母は五郎を僧にしようとしたが、五郎はそれに従わなかったため勘当された。しかし、母は敵討ち前に兄十郎のとりなしで勘当を解いていた。　不孝＝勘当。　二宮の女房＝十郎・五郎の姉。　一切有為法、如夢幻泡影、如露亦如電、応作如是観＝『金剛般若経』の一節。　曽我の太郎＝十郎・五郎の養父。

問1 傍線①の「悔しけれ」、②の「眺む」、③の「給ふ」、④の「死に失せ」の活用形を、それぞれ次のなかから選び、その番号をマークせよ。

1 未然形　2 連用形　3 終止形　4 連体形　5 已然形　6 命令形

問2 傍線㋐の「何時の世にかは忘るべき」の意味として、最も適当なものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

1 何度生まれ変わっても忘れることはできない。
2 命のある限りどうしてこの世を忘れられるだろうか。
3 いつもの生活でも必ず思い出してしまうはずだ。
4 どのような人生も記憶に残しておきたいものだ。
5 現世でも来世でも覚え続ける必要があるのだろうか。

問3 A には「気を失いなさり」を意味する表現が入る。この意味にあてはまる表現を、本文中からそのまま抜き出して、六字で書け。

問4 傍線㋑の「知ろしめすべけれ」を十二字以内で現代語訳せよ。

問5 傍線㋒の「よしや、中々それとても、今はよかりけり」と母が思う理由として、最も適当なものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

1 息子たちに冷たく接したことを悔んだが、それが私たちの運命であったのだとあきらめたから
2 普段以上に息子たちに付き添っていたら、より一層彼らに未練を残しただろうと思ったから
3 五郎の勘当を許したことで、息子たちは満足してあの世に行くことができたと想像したから
4 息子たちの死は悲しいが、年老いた自分はすぐに来世で再会できると思いうれしくなったから
5 小袖を形見に残した息子たちに感動し、自分の子育ては間違っていなかったと実感できたから

問6 傍線㋓の「弔はるべき身は留まりて、弔ふまじき者を弔ふこそ、誠に定めなき世と知られけれ」が示す母の思いとして、最も適当なものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

1 僧侶が行うべき息子たちの供養を母と姉が行うという矛盾から、仏教の述べるはかなさを思ってしまった。
2 不幸なまま死んだ息子たちに比べ自分は平穏に生きている立場の違いに、これも前世の宿縁なのだと諦めた。
3 正義を貫いた息子たちが賞賛されずに弔われた理不尽さから、世の中は思い通りにならないと実感した。
4 敵討ちを成し遂げた息子たちが罪人として処罰された現実を見て、幕府の政治に対する強い不満を露わにした。
5 死んだ息子たちを母が供養するという、普通とは逆転した状況に、無常の世の中を感じずにはいられなかった。

問7 本文の内容に合うものを、次のなかから二つ選び、その番号をマークせよ。

1 母は息子たちの手紙を読むことができない上に、五郎を勘当したことで長い間離ればなれであったことを悔やんでいる。
2 息子たちの死はつらいが、五郎の書き残した経典の一節や十郎の読んだ書物を見ると、母は次第に心が落ち着いてくる。
3 二宮の女房は十郎・五郎の手紙を読んで、神仏のご加護によって二人の願いが実現したことを知り、とても喜んでいる。
4 曽我の太郎は十郎・五郎を実の子と同じだと思いつつ、二人に満足な生活をさせてやれなかったことを残念がっている。
5 息子たちに死なれた悲しみの上に、二人とも私を恨んでいるはずだと考えた母は罪を償うために出家する決意をしている。
6 死を強く願う母に対し、周囲の人々は『平家物語』の例を示しながら息子たちの死は早く忘れるようにと説得している。

問8 『曽我物語』と同じジャンルの作品を、次のなかから一つ選び、その番号をマークせよ。

1 栄花物語　2 方丈記　3 太平記　4 今昔物語集　5 松浦宮物語　6 讃岐典侍日記